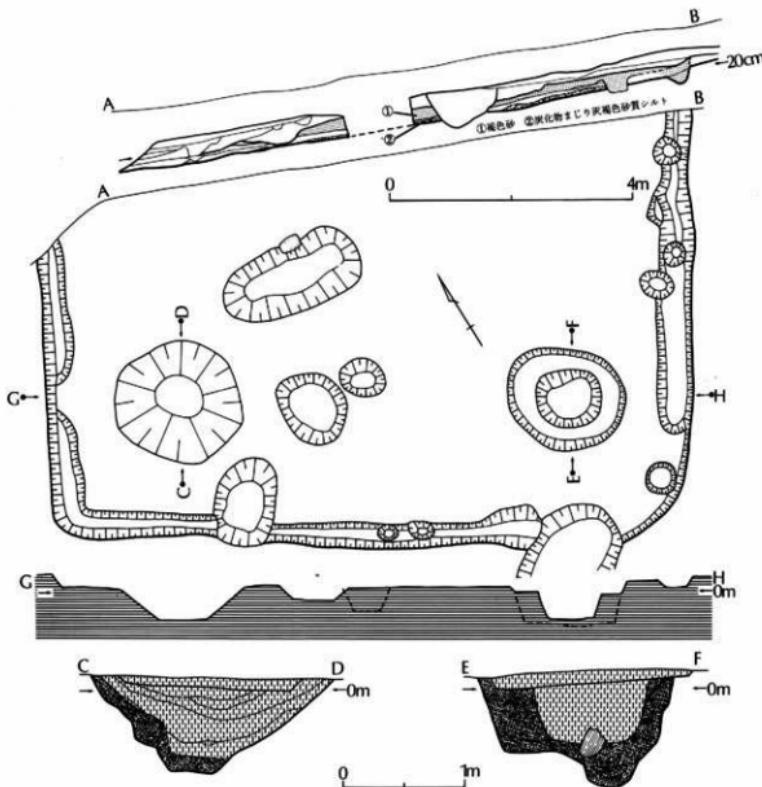


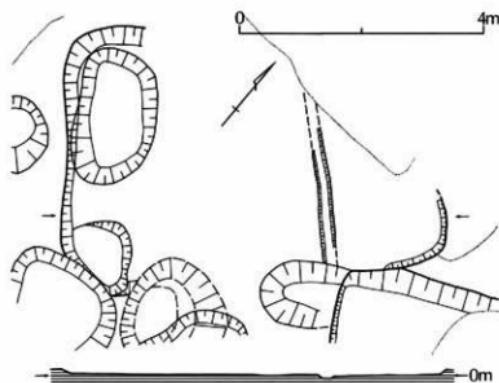
**SB28** (図版10・15) 二つの調査区にまたがって二分されたため、残念にも北半分は確実には検出できなかつた。それでも、土層セクションなどから復元すると、長軸が南北にくる1250cm × 1060cmほどの大形長方形堅穴住居となる。掘形は深さ約30cm 残存。周溝は幅40cm ほどで、断続しながら全周すると思われる。

主柱穴は径180~200cm、深さは床面から約80cmという規模であり、柱ぬきとり痕?から推測する柱本体の径も50cm内外という巨大さである。床面の貼り床は確認できなかつたが、炭化物層がほぼ全面に存在し、また床面に近い埋土には炭化物・焼土・焼け焦げた材が遺存していたので、なんらかの理由で焼失したのであろう。埋土上部には砂層が堆積しており、洪水の影響をうけている。I-1b期。



第12図 SB28 プラン・セクション・土層セクション (1:80)  
柱穴セクション (1:40)

**S B29**  
(図版11) 炭化物の薄層が平坦に散布し、いかにも床面の存在を示すというところから検出したものであった。柱穴・周溝は不明だが、一応上下2群に区分できる土器の良好な廃棄が得られた。下面の土器はほぼ床面上にあり、I-1b期に属す。



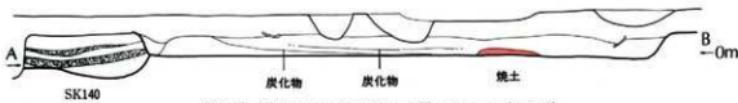
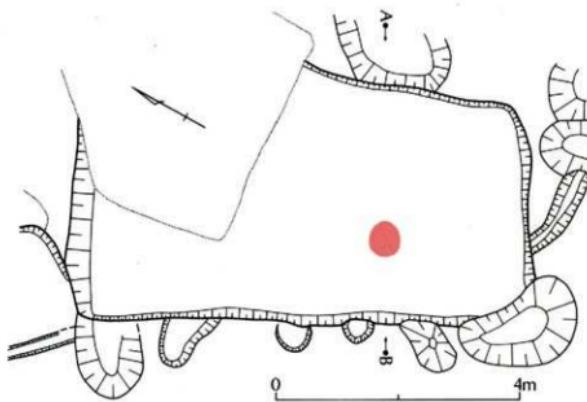
第13図 SB29プラン・セクション (1:80)

**S B30**  
(図版11) 長軸750cm、短軸中央で約410cmを測る、北辺が南辺より長い長台形プランを呈する。掘形は深さ約20cm。床面には薄く炭化物層が認められた。柱穴・周溝は不明。埋土中には土器の集中する箇所が北部と南部の2ヶ所にあり、南部は南からの廃棄を示しており明らかに堅穴住居埋没過程中における窪地内部への廃棄であった。ただ、北部の土器群は河原石とともに床面に接して遺存していた。I-2期。

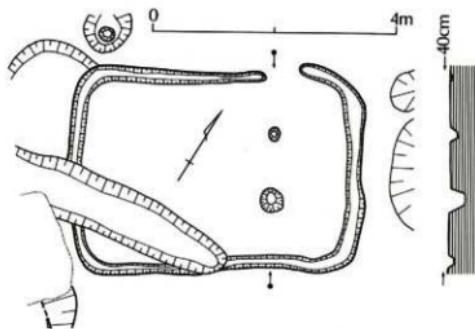
**S B31**  
(図版11) 長軸460cm、短軸330cmを測る隅円長方形プランを呈する。周溝と柱穴のみの検出で掘形は残存せず。出土土器などからみてI期に含めたが、床面レベルは30cm前後と高い。

**S B39**  
(図版12) 全形は不明で柱穴・周溝も未検出である。だが、土層セクションの観察では住居と考えられた。床面上での炭化物の遺存は認められなかったが、やや粗い褐色砂が全体に薄く堆積していた。埋土中には河原石や比較的大きな土器片が含まれていた。I-1b期。

**S B41**  
(図版12) ほかの遺構と複雑に重複しており全体の形は掴みがたい。土層セクション・床面状況などから住居と認定した。



第14図 SB30プラン (1:80)・土層セクション (1:40)



第15図 SB31プラン・セクション (1:80)

**S B42**  
(回版13) SB43によって切られる。約440cmの一辺および周溝・柱穴の一部を検出。南西辺は周溝が不明確となっている。ほとんどを戦前・戦中の遺構によって破壊される。

**S B43**  
(回版13) SB42を埋めて床面としている。掘形は25cmほど残存。SB42とは軸線が少しずれているが、SB51例を参考にすると拡張の可能性もある。床面上には炭化物が散布し、棒状の河原石と土器が遺存していた。SB42と同様ほとんど破壊されている。

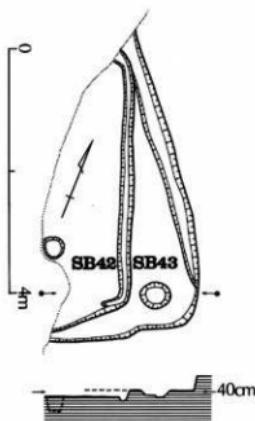
**S B44**  
(回版13) 本住居跡も戦前・戦中の遺構によってほとんど破壊されており、全体は不明である。

**S B45**  
(回版13) プランは不整形であるが、円形かもしれない。掘形は深さ約20cmほど残存。床面上には薄い炭化物がわずかに遺存していた。南部西壁際の土坑SK166内に堆積した炭化物層からは3600粒以上の炭化米、ガラス質石英安山岩のチップ、また床面上の炭化物層からもガラス質石英安山岩チップ多数を検出した。このことは、本住居内での石器製作を示すものと考える。

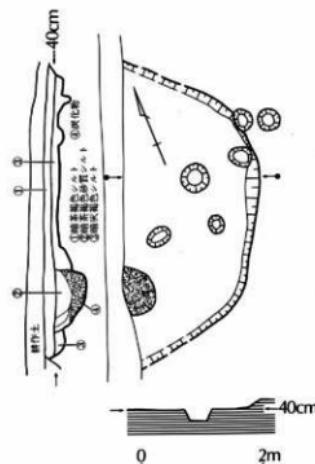
**S B46**  
(回版13) 炭化物層の広がりをもとに掘形を追及したが、周溝・柱穴ははっきり掘むことができなかった。包含層の落ち込みかとも思えるが、自然状態での堆積は考えられないの住居跡と認定した。

**S B47**  
(回版14) 脳張りの方形と思われるが不整形なプランである。一辺約320cmを測る。中央部床面上には炭化物と焼土が薄く堆積していた。

**S B48**  
(回版14) SB49に切られて全体は不明。隅円長方形プランで、短軸約320cmを測る。床面には貼り床が認められた。



第16図 SB42・43プラン・セクション (1:80)



第17図 SB45プランセクション・土層セクション (1:80)

**S B49** 長軸約400cm、短軸約320cm  
(図版14)

の長方形プラン。周溝はほぼ全周するが柱穴は不明。  
埋土上部にはSB19と同様の砂層が堆積し、床面直上には小形窓、窓などが遺存していた。SB53に切られる。

**S B50**  
(図版14)

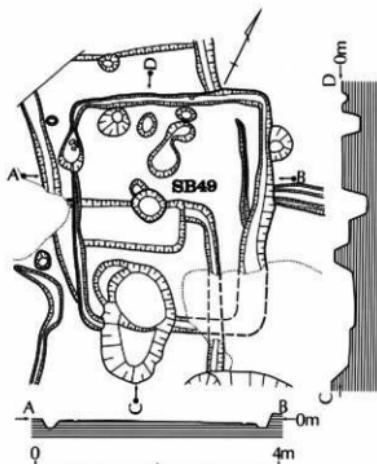
後世の擾乱のためにほんの一部分の検出にとどまった。磨製石斧の破片が1点出土している。

**S B51**  
(図版13)

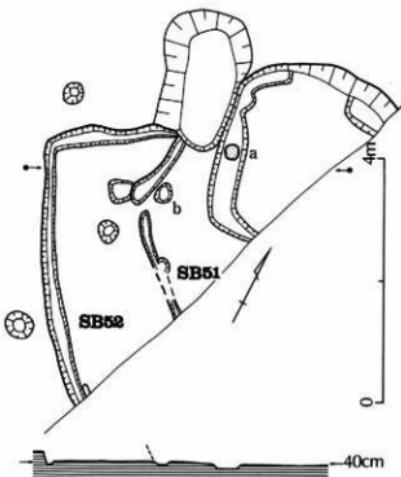
a は一辺約320cm の比較的整った隅円方形プランであるが、b は長軸500cm以上を測る不整形の洞張り方形プランのようである。  
a → b は拡張と考えられるが、軸線は約15度ずれている。a 周溝上有にある円礎(49)は直径30cmほど  
台石で据え置かれたものである。床面上には炭化物・  
焼土の堆積がみられた。  
SB52とはほぼ同レベル。

**S B52**  
(図版13)

SB51に切られる。床面および周溝には炭化物と焼土が堆積していた。掘形は深さ25cmほど残存。

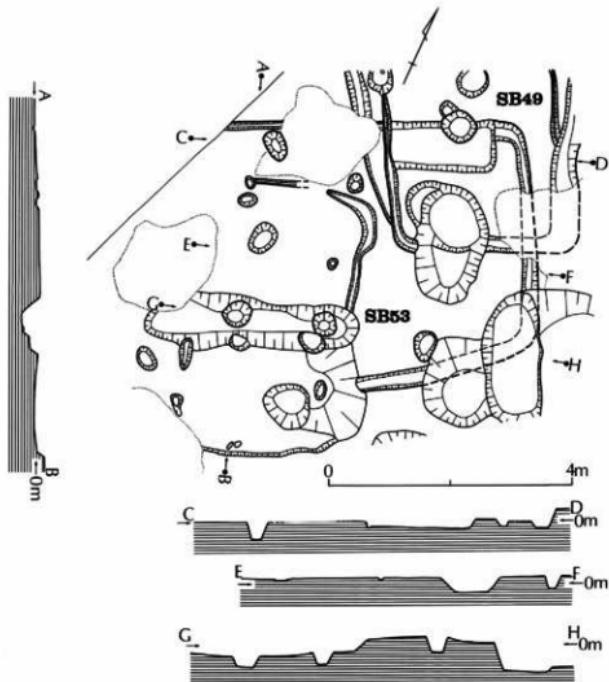


第18図 SB49プラン・セクション (1:80)



第19図 SB51・52プラン・セクション (1:80)

SB53  
(図版14) SB49に切られる。かろうじて周溝の連続によって確認できるにすぎず、検出時はほとんど平坦であった。東辺約425cm、長軸は600cm以上あろう。内側にも周溝が一部認められるが、これは拡張前のものかどうか不明。もう一軒重複しているのかもしれない。



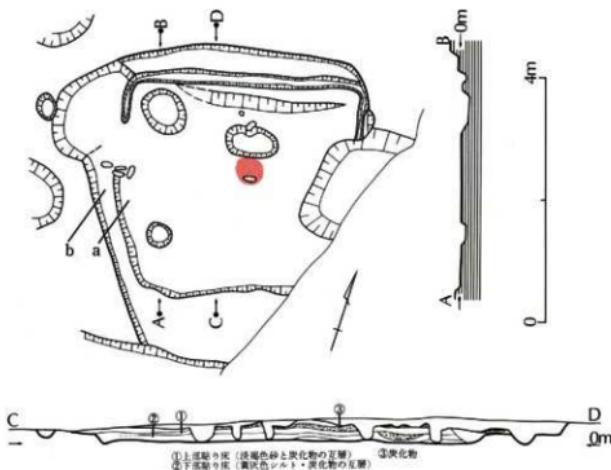
第20図 SB53プラン・セクション (1:80)

SB54  
(図版14) 周壁が平坦部によって上下2段に分かれる。おそらく平坦部はベット状遺構ではなく、拡張後の床面なのであろうが、拡張後の住居プランは実測図はほどはっきりしたものではない。

aは長軸395cm、短軸355cmを測り周溝がめぐる。掘形は深さ約10cm残存。北辺側では周溝の内側にも平坦部がせりだしている。床面は中央部やや北寄りに炭化物や焼土の薄層があり、そこで甕の底部1点が外底面を上に向けて出土した。埋土は薄い層が何枚も重なっており、貼り床状を呈していた。

bは、おそらく短軸であろう東西軸が約440cmを測る。掘形は深さ約16cm残存。周溝

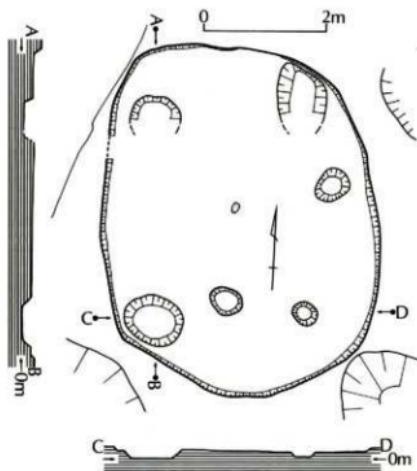
は未検出である。貼り床が認められた。西辺中央部近くで河原石の棒状礫が集積されていた。



第21図 SB54プラン・セクション (1:80)・土層セクション (1:40)

S B55  
(図版14)

炭化物薄層を追跡して検出した住居跡である。そのため、小判形のプランは厳密には確定したものとは言えない。本来は長方形であったと思われる。柱穴は4つ検出したがいずれも浅く問題がある。



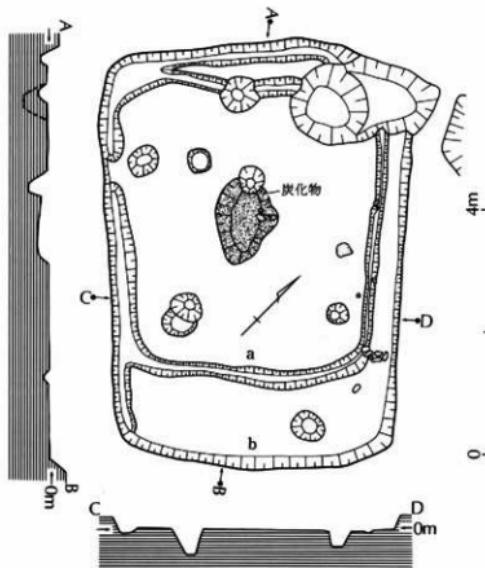
第22図 SB55プラン・セクション (1:80)

SB56  
(図版14) I期の住居跡では比較的良好な遺存状態である。拡張がおこなわれている。  
aは中軸線で長軸485cm、短軸465cmを測るが、北西辺が南東辺に比べやや長い。周溝はほぼ全周する。

bは中軸線で長軸670cm、短軸485cmを測るがこれも北西辺が長い。周溝は北東辺と南東辺の拡張部側に存在しない。掘形は深さ約20cm残存。

床面の中央部には長辯円形の土坑があるが、内部には炭化物や焼土が充満していた。検出状況ではbにともなう。

埋土には炭化物や焼土のほか、土器が廻棄状況で多量に含まれていた。a・bの南部コーナー寄りの床面直上には土器が廻棄された状態で幾つか遺存していた。また、b周溝の南東コーナー付近には棒状を呈する河原石の集積があり、これらのことから本住居が焼失家屋であった可能性が指摘できる。I-2期。



第23図 SB56プラン・セクション (1:80)

**S B59** SB28の南に隣接して検出した住居跡である。2回拡張が行われている。ほとんど周溝のみの検出にとどまった。

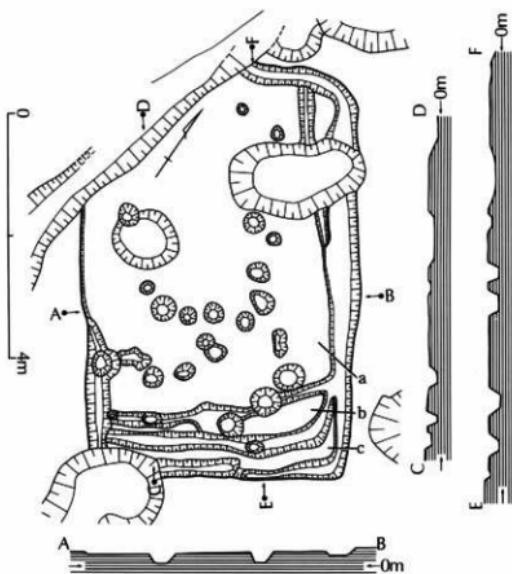
aは長軸560cm、短軸400cmで南東短辺がやや長い。

bは北東コーナー付近と南方への拡張であるが、北東コーナー付近はプランを長方形に修正するためのものようである。長軸方向へ約40cmの拡張である。

cはbを長軸方向へ約40cmほど拡張している。

床面は拡張とともに貼り床が認められた。

多數の柱穴を検出したけれども、組み合わせははっきりしない。



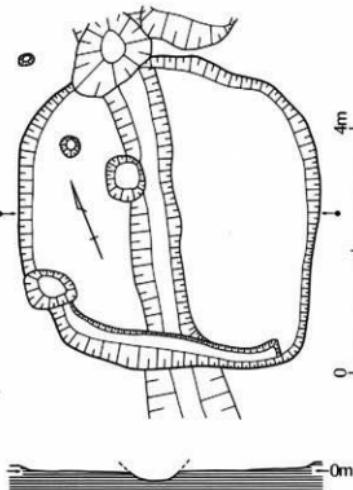
第24図 SB59プラン・セクション (1:80)

**S B 64**  
(図版15) SD07に中央部が切断されている。1辺約500cmの胴張りの隅円正方形であるが、検出状況はそれほど安定したものではない。埋土には褐色砂がふくまれていたので洪水によって埋没したと推定できる。

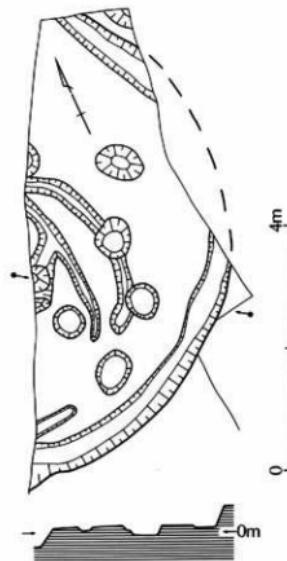
**S B 66**  
(図版16) 住居としてはきわめて不整形なプランであるが、炭化物薄層を床面として検出した結果であるので、一応住居跡と認定した。

**S B 72**  
(図版19) 全体の5分の2ほどを検出した。円形プランと推定され、復元すると直径約900cmとなり、比較的床面積の広い住居となる。掘形は深さ約40cm残存。埋土には炭化物や焼土が含まれていたが、土層セクションの検討では別の住居跡の床面が複数確認できた。

ところで、本住居跡の南半部の埋土中には灰白色砂が含まれていた。土層セクションでは南に展開する谷A内に連続する層位であり、一時期谷Aが拡大して侵食した結果と推定した。時期はI-1b期を下らないと考えられる。住居の西半分が検出できなかったのはこのためであろう。

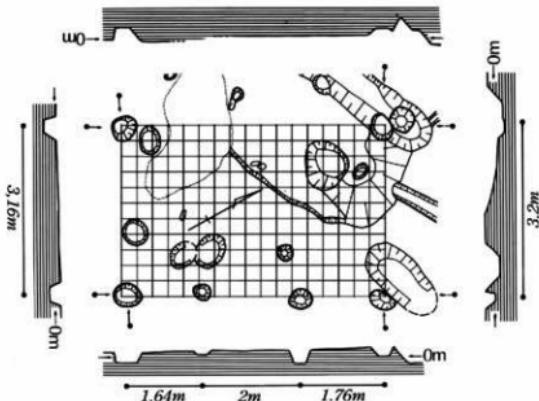


第25図 SB64プラン・セクション (1:80)



第26図 SB72プラン・セクション (1:80)

**SA01  
(図版14)** 住居群の密集する地区で検出した。NR01の北に隣接し、柱穴埋土は NR01と同じであった。NR01は後述するように I - 2 期と考えられるので、柱穴の時期は同じか若干先行すると推定する。SA01付近ではほかにも柱穴を幾つか検出しているが、埋土が異なったり、並びが悪かったりで、確定するには至らなかった。



第27図 SA01プラン・セクション (1 : 80)

**NR01  
(図版13・14)** 検出状況では SA01のすぐ南から始まるが、底部の傾斜からいえば、まだ北へ続くと考えられる。褐色砂の連続を重視するなら SB19までは延びるであろう。とくに、出土土器の中には SB19の21に類似するものがあることは、重要である。流路の形成期は I - 2 期をさがるものではないと推定する。

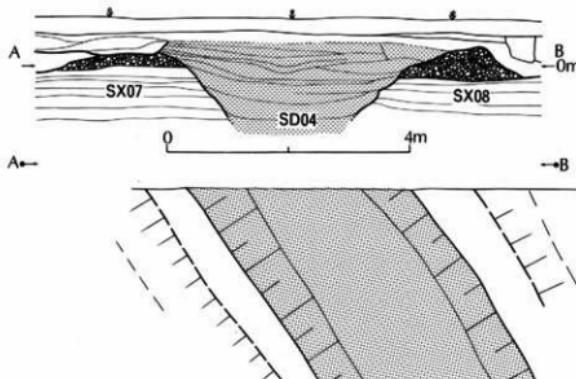
**NR02  
(図版16)** SK261付近から始まる。検出当初は、底面が比較的深く側面の立ち上がりも安定し、埋土も何層にも分層できたので溝(57H SD1016)と認定したが、その後自然流路に変更した。底部が深いのは基盤が灰白色砂であるために強く侵食されたからである。それに対し NR01は基盤が黄灰色シルトでしまっていたので、侵食があまり及ばなかったためそれほど深くはならなかったのであろう。

出土土器は NR01に比べ古い時期の一組が存在するけれども、恐らく侵食した遺構の土器が流れ込んだのであって、時期は NR01などほかの褐色砂を含む遺構と同じであろう。

**SD04** 居住域の北縁を北東から南西に走る幅約400~500cm、深さ140cm内外の比較的大きな溝である。埋土は下層がシルトを主とし厚さミリ単位の薄い砂層を混じえるが、上層は頻繁な流水のあったことを示すのか、厚さ2cmぐらいの薄い砂層が継状に累積している。遺

物の多くは上・下層の境界付近から出土している。基本的にはⅠ期のうちに埋没したのであろう。

溝の両側には土堤状の高まり（SX07・08）が平行してある。溝掘削時の堆土であって、とくに構築物としての性格は薄いかかもしれない。



第28図 SD04・SX07・08プラン・土層セクション（1:80）



第29図 SD04土層セクション写真（西→）

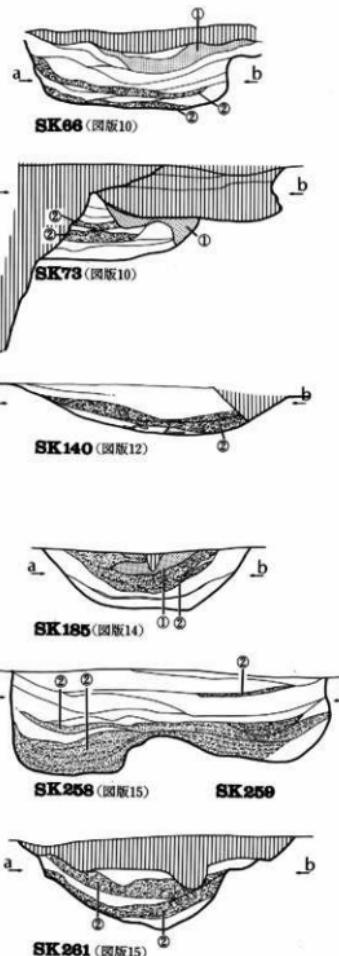
S D12  
(図版11) プランははっきりせず、とくにSD04との連続部分が不明確である。埋土は炭化物や遺物を多く含み、流水の痕跡は顕著に認められなかった。底面はそれほど平坦でなく、また側面の立ち上がりも緩やかである。溝などの人工物というよりは、「自然の窪地」といった表現のほうが適している。

SD04付近の土層セクションでは、下部に大きな谷地形が存在しており、これがSD12に相当するすれば、SD04に先行して存在していたことになる。検出の失敗は、現代の擾乱と発掘区の位置関係が良くなかったために充分な検討ができなかつたからである。

**SK(土坑)** 土坑は、埋土の状態から、  
 a類：単一層からなり分層できないもの、  
 b類：斑状をなして分層できないもの、  
 c類：縦状の断面で分層できるもの、  
 の3類型に区分できる。さらに、c類はもっぱら焼土を含むものともっぱら灰・炭化物を含むものとに区分できるが、多くは程度の差であり普通は両者を含むので、ここではとくに区別しない。そのほか土器が多量に廃棄された土坑も若干存在する。

右に土層セクションを提示した土坑はいずれもc類である。灰・炭化物が層をなして存在するが、細かく観察するなら、それぞれの層もさらに複数層に分かれること、つまり一回の廃棄が一つの灰・炭化物層ではない。おそらく何回も廃棄されたのちにいったん中断してその間に自然に黄灰色シルトが流れ込んだか、黄灰色シルトによってその表面が塞がれたかである。いわゆる貼り床が黄灰色シルトによって施されていることと同じことであろうか。とくに、交互堆積の特徴的なSK66・73・261などは、土坑が一定期間埋められることなく機能し続けていることを示している。

こうした土坑は、だいたい群をなして住居跡群に隣接して点在しており、特別な機能ではなく、日常的な用途にあったことは明らかである。しかし、生活残滓一般が廃棄されたのではなさそうである点は重要である。

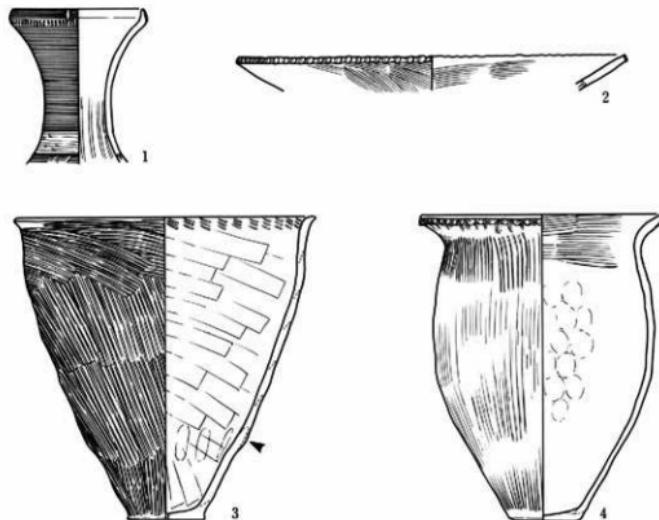


第30図 土坑土層セクション (1:40)  
 ①褐色砂 \*矢印は標高0mを示す。  
 ②炭化物

## 遺物

### 土器

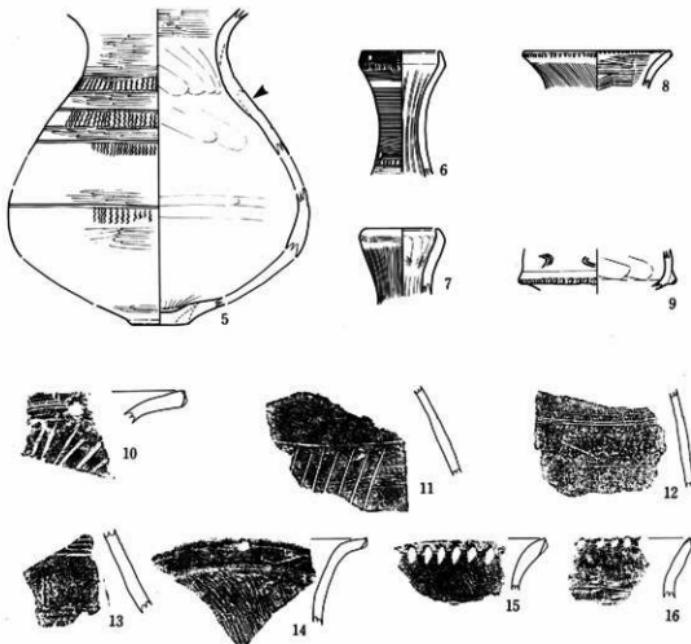
- SB15 1は細頸壺 Aa(櫛描紋 b類:櫛 I種 a類)。口縁部屈曲部に二枚貝刺みを→方向に施している。櫛描紋も同様か。口縁部棒状浮紋にはハケメ工具圧痕。黒色仕上げ。
- 2は粗製の高杯 A。口唇部に直行して刺み(板?)が施される。
- 3は二枚貝調整を施した深鉢。底部に焼成後穿孔が施されている。口縁部内面には←方向に二枚貝押し引きがある。櫛条痕系の条痕紋深鉢を模倣したものである。
- 4は甕 D。口唇部下部に粘土紐を付加しハケメ工具による連続刻みが施される。刻みは口縁部の半分まで及ぶ。底部成形はdである。



第31図 SB15出土土器

**SB17** 5は太頸壺A(二枚貝刺突紋系)。一次調整は不明だが、二枚貝刺突→沈線→研磨という順序である。底部成形はaである。底部内面は研磨されており、成形第一段階での調整としては丁寧な部類である。6は細頸壺 Aa(櫛描紋c類:櫛I種a類)。口縁部屈曲部にD字刻み(板?)が→方向に施されている。櫛描紋も同様か。頸部櫛描紋直下には櫛刺突。黒色仕上げ。7は粗製の細頸壺 Aa。8は口縁部がラッパ状に開く粗製壺。9は小型壺。おそらく細頸壺 Aa 系統であろう。10は太頸壺 B。11は櫛描紋 b類。12は櫛描紋 b類で単帯。13は0期壺体部破片である。

14は壺 Aa。体部はハケメ。15.16は壺 Ac。体部は二枚貝調整。



第32図 SB17出土土器

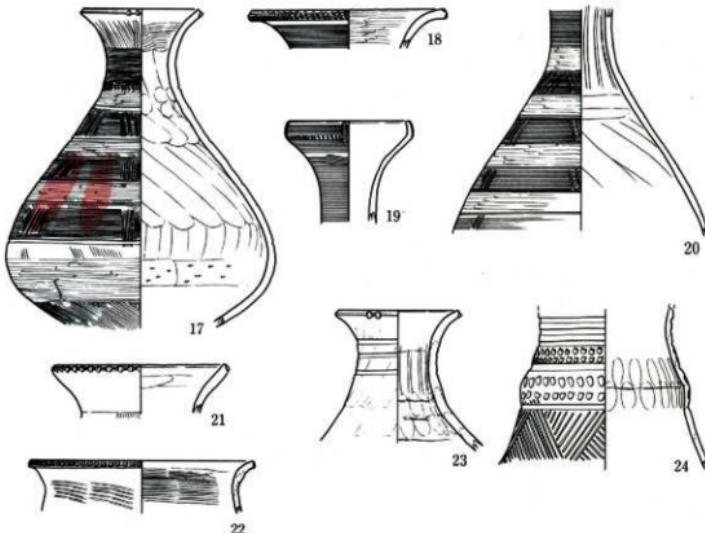
**SB19** 17は細頸壺 Ab(櫛描紋b類:複帯3段)。櫛描紋原体は櫛II種b類。継位直線は3・3・3・7の櫛III種。体部下半の屈曲は弱い。口唇部には2個一対円周4分割の位置に部分圧痕がある。黒色仕上げではなく黄褐色を呈するが、赤彩が認められる。口唇部に刻みを施す相

似形(折衷型)がもう1点ある。18は太頸壺A(櫛I種a類)。口唇部上下にハケメ工具の刻み。黒色仕上げ。19は細頸壺Aa。20は細頸壺Aa。櫛描紋b類だが单帯で多重复化の傾向にある。縦位直線は $(2 \cdot 2) \times 2$ の櫛III種。黒色仕上げ。21は17と同類。

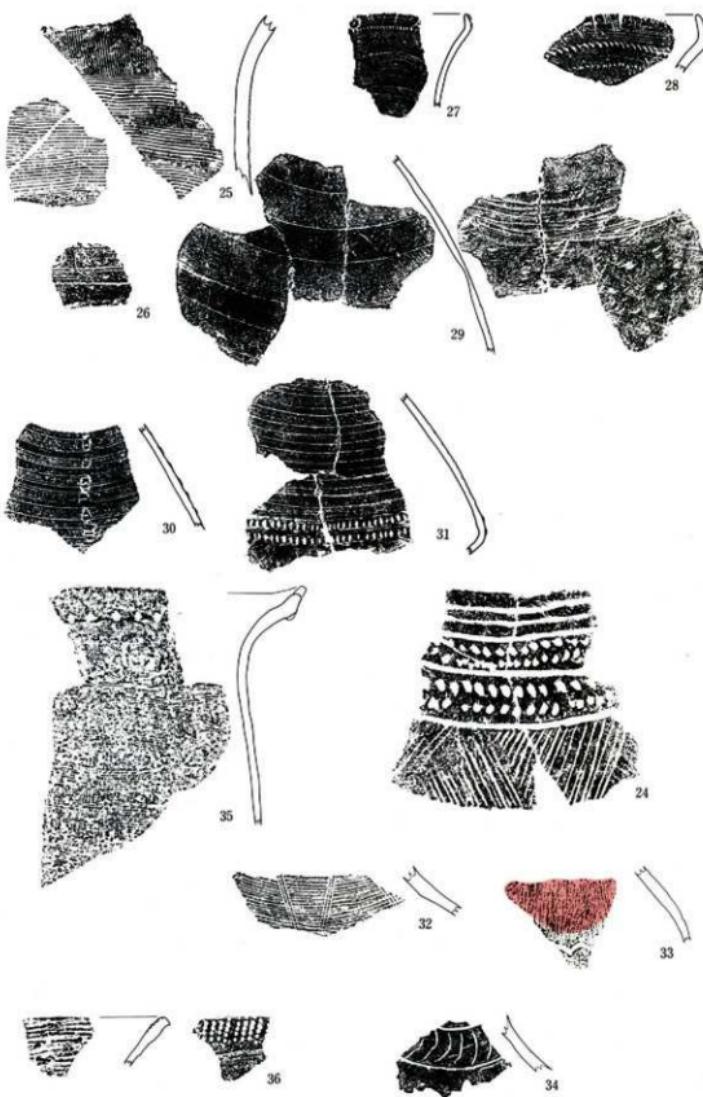
22は壺Ac。

23は口唇部の刻みは3分割で、17と相似形である。調整は板ナデ。23が17を模倣したのではなく、その逆であろう。淡灰色。24は太頸壺C。赤褐色。25は0期太頸壺破片。26は櫛描紋a類の破片。27は細頸壺Aa 口縁部(櫛描紋c類だろう)。D字刻み(→方向)を挟んで上下に波状紋。黒色仕上げ。28は細頸壺Aa(櫛描紋b類)。口縁部屈曲部のD字刻みだけでなく頸部上半にも押し引き状の列点。どちらも→方向。黒色仕上げ。29は櫛描紋b類:複帯2段单帯1段。縦位弧線は $3 \cdot 3 \cdot 3 \cdot 3$ の櫛III種。内面に爪圧痕多数。黒色仕上げ。30.31は櫛描紋c類。同一個体のようだ。黒色仕上げ。橢円形浮紋上にはハケメ工具の圧痕。32は太頸壺Bの体部破片。黒色仕上げ。33は太頸壺Cの体部破片。切り込みの鋭い複合鋸歯紋の下部に連弧紋。赤彩痕あり。灰色。34は黒色仕上げだが、系統不明。ナデ調整のあとに沈線紋。

35は有段波状口縁甕。D系統大形甕の口唇部上縁に粘土を付加し、ゆるやかな隆起を4ヶ所形成して波状にした後、頂部にハケメ工具で圧痕を施す。体部にはハケメ工具による複帯直線紋。36は深鉢Cb。



第33図 SB19出土土器 (I)

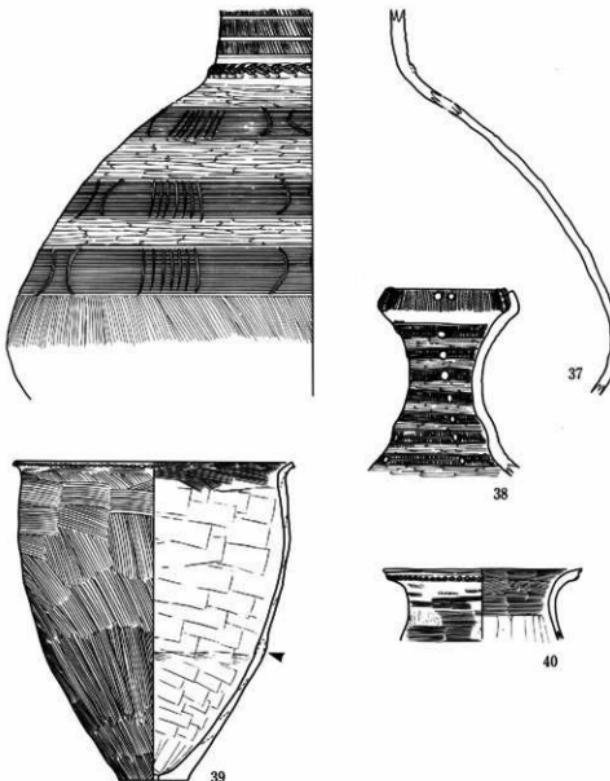


第34図 SB19出土土器 (2)

SB28 37は太頸壺A。頸部に沈線紋、頸体部の境界にハケメ工具によるX状刻み突帯。体部には櫛I種A類による櫛描紋d類。縦位分割は沈線の平行線と弧線を交互に配する。

38は細頸壺Ca(二枚貝刺突紋系)で、恐らく体部下半には連弧紋が施される。太頸壺A(二枚貝刺突紋系)と施紋の基本は同じであるが、本例は二枚貝刺突紋帯の中央にさらに沈線が附加されている。こうした手法と共に通る例は縄紋を施した太頸壺にみられる。施紋手法の相互影響であろう。頸部下半にある隆起は続条痕紋系土器の壺に特徴的な成形法である。口縁部の棒状浮紋(正痕をもつ)および頸部にかけて施される円形浮紋は円周3分割の位置にある。口縁部には円形浮紋が2つだけ下図の箇所に(正面?)。黒色仕上げは不十分。

39は甕A。底部に焼成後穿孔。40は甕D。口縁部の連続刻みは一見刻み目突帯のようである。



第35図 SB28出土土器